

学力・生活面の難しさを感じるA君・B君の変容：
学級の安心感に支えられて成長する子どもの姿

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 綾乃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007239

学力・生活面の難しさを感じる A 君・B 君の変容

—学級の安心感に支えられて成長する子どもの姿—

佐藤綾乃

1. はじめに

子どもたちを育て、人との関わりを持つ場として、家庭・地域・学校がある。その中でも、学校は、同年齢の子どもたちや異年齢の子どもたち、教師などの大人たちと様々な関係が形成できる場である。よって、学校は、子ども達が将来の大きな社会へ羽ばたく前の小さな社会の一員として、社会性を身につけ、様々な知識や経験を得る場であると考えられる。そこで、学校という大きな枠の中にある小さな枠である学級を一つの単位と捉え、教師の支援や周囲の子どもとの関わりを観察し、「個が安心感を持てる学級」はどのような学級であるのか、また「個が安心感を持てる学級づくりに必要な支援」は何であるべきかを探りたいと考えた。

2. 目指す学級づくり

子どもたちの一日の学校生活の中で学級の果たす役割は、大きく、また多様である。よって、教師（担任）は、子どもを把握する力や学級を運営する力などが求められる。筆者の目指す学級は、子どもにとって居心地の良い場（安心感や存在感を抱くことができる場）であること。つまり、それらが成立することで、学校生活を楽しく送ることにつながるものと考えている。よって、学級の子ども一人ひとりの個を大切にしながらも、集団を意識した学級づくりを目指していくために、次に挙げる2点を意識した学級づくりが必要であると考えていた。

1つめに、個への指導である。一人ひとりが学級の役割をもち、責任をもって活動をすすめるためには、教師の支援や周囲の友達の賞賛による喜びが重要であると考えられる。2つめに、集団への投げかけである。学級の全員が一人ひとりを大切にできる姿勢が必要である。学級が自分一人の力で動いているのではなく、みんなで協力していくことによって、楽しく・喜びがあることを子どもたちが実感していく。よって、子ども一人ひとりが、仲間との関わりから自分一人ではなく仲間と一緒に様々な感情に出会うこと、また、その思いを受け止めてくれること、そして、それらを実際に仲間とともに体験することで、人との関わり方や相手を大切に思うことが自然と身についていくと考える。

3. 「安心感」がもてる学級

生活習慣の確立が不十分であることや問題行動等、いじめやいじめによる子どもの自殺が小学生にもおきている。また不安を感じたりしている子どもが増加するとともに、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど人間関係の形成が困難かつ不得手になっているとの指摘がある。そのような中で、筆者は、子ども一人ひとりが学校に行きたい、学級の友達といることが嬉しい、安心感をもてる学級を子どもたちとつくっていくことが必要であると考えられる。

筆者の考える「安心感」がもてる学級は、次の4点が大事であると考えられる。1つめに、子どもたちが毎日学校に行くことが楽しいと感じている。2つめに、子ども一人ひとりが友達といることで嬉しいと感じ、落ち着くことができる。3つめに、子どもが自分自身を自然に表現できる。4つめに、児童一人ひとりが学級での役割に責任感をもてる。そのような学級を目指している。

4. 実習を通して学級を観察する際の3つの注目点

目指す学級を実現するための手がかりとして、A君・B君の学習面や人間関係における変化を観察していくこととした。観察の注目点として、次の3点を設定した。

1 つ目は、対象の子ども（A君とB君）の観察である。授業や休み時間におけるその子の学びの難しさや周囲の子どもたちとの関わり方を観察した。

2 つ目は、周囲の子どもたちの観察である。A君・B君への関わりかたやA君・B君が周囲とどのように関わりをもっているのかを観察した。

3 つ目は、教師の指導支援の観察である。A君・B君への指導支援の方法や学級全体への投げかけを観察した。また、その指導支援する教師の考えを観察後うかがった。

また具体的な観察を行うと同時に、小学生の発達について調べ以下にまとめた。

5. 小学校中学年から高学年の人間関係の発達

1-2年生は、家が近かったり、席が隣であることで友だちになる。これに対して3-4年生は、気が合う、趣味が同じといった性格面が大事になってくる。ただ、クラス替えがあればあまりいっしょに遊ばなくなるといわれており、気が合うといっても、あくまで学級が同じという制約のなかの関係である。学習の発達面では、論理や規則にうるさくなる。さぼりやルール違反がわかるので、友だち同士の指摘が厳しくなる。他人の失敗はしつこく非難するが、自分の失敗には気づかなかったり、気にしない。（村野井均, 2009, p 89-91）

児童期後半には、自己中心的思考から脱却し、他者の視点を考慮にいたした行動が可能になる、あるいは他者理解の能力の向上に伴い、友人関係の構築もかなりスムーズに行えるようになるといった、他者理解の発達とのかかわりで自己認識が形成されていくといわれている。（山本睦, 2009, p144-145）

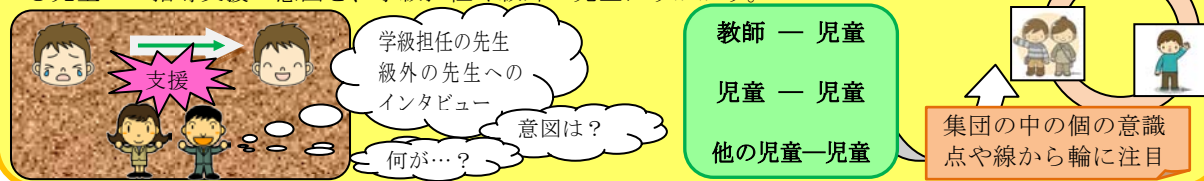
高学年の児童は、学校行事や委員会活動や異学年集団での活動などで中心となって活動する機会が増えてくる。よって、責任感や協力することの大切さや学年をこえた交流を実感することにより他者を思いやる気持ちが芽生えてくる時期である。

6. 小学校中学年から高学年を通じた発達におけるつまずき

中学年から高学年に上がるにつれて、友達関係の構築がなされていく。その時期に、行動を自分で抑え、感情をうまく伝えられない子にとっては、人間関係づくりに難しさを感じる。また、仲間意識が強くなることによって自分の思いを伝えるにくくなる子など、この時期の子どもたちの人間関係づくりは、慎重に指導支援を行っていく必要があると考える。また、学習面においてもつまずきが増えてくる時期でもあり、一人ひとりが「わかる」授業を展開することが望ましい。

7. 研究方法

- 滞在校であるC小学校6年生A君、D小学校5年生B君を2年間にわたり観察支援を行う。（児童対児童、児童対教師、他の児童対教師から児童の関わりを分析）
- 児童の表われを観察し切り取り、その言動の背景と指導支援の方法について分析を行った。
- 児童への指導支援の意図を、学級担任や級外の先生にうかがう。



8. A君の変容 B君の変容

(C小学校：A君の変容)

- こだわりが強い。
- 自分の気持ちを表現することが苦手。
- 周囲の言葉に敏感。
- 友達に声をかけられてから行動する。
- 活動の取り組みに時間がかかる。

- ◎A君に対する学級の子どもたちの関わり方の変化。
- ◎A君の良さを認め、受け止めている。
- ◎A君が、自分に自信を持つことができた。
- ◎周囲の言葉に耳を傾け、落ち着いて行動できる。
- ◎友達との関わりを自分から積極的に行う。
- ◎苦手なものにも挑戦する姿勢や意欲がみられる。

(D小学校：B君の変容)

- こだわりが強い。
- 自分の気持ちを表現することが苦手。
- 叱責を受け入れられない。
- 他者への依存が多い。

- ◎B君の周りの子どもたちとの関わりの変化。
- ◎B君が、自分に自信をもてるようになってきた。
- ◎自主的に行動する場面がみられる。
- ◎友達の言葉に耳を傾ける。
- ◎学習姿勢の定着、活動が積極的になってきている。
- ◎周囲の友だちの良さを認めあう。
- ◎授業のまとめに自分からコメントを書く。

9. A君・B君の事例からみる学級づくり

①A君の事例から見る学級づくり

A君のつまずきに対して、全てを支援するのではなく、彼自身の力でできる事は、一人で行う。活動のいたるところに段階を踏んだ指導支援を教師側があらかじめ考えておくことによって、子どもたちのつまずきや頑張り、または努力不足の部分が把握でき、教師の子どもへの声かけのポイントとなっていた。A君に対して教師は、特別な指導支援を行っているのではなく、学級にいる子どもたち一人ひとりに対して関わり、子どもが学ぶことの楽しさを感じ今後の学習や将来に向かって自分の力で立ち進んでいけるようにしていく指導や声かけを行っていた。難しさを感じる子への指導は、周囲の子どもたちにも共通の指導であり、特別視などをすることなく、互いに友達同士のよさを認め合えることが大切なことである。よって、子ども一人ひとりの点が周囲の子どもや教師と線で結ばれるだけでなく、輪としての関わり方がみえた。

学級に在籍する子どもは、一人ひとり異なる特徴をもっているが、その違いを評価するのではなく、個として認め合えることが大切であると事例やインタビューを通してわかった。つまり子どもたちにとって学級は、「自分を受け止めてくれる友達がいる」と思える場所であることが求められているといえる。

②B君の事例から見る学級づくり

子どもたちは、学級の友達や先生から褒められる体験を繰り返し経験することで、次への活力となる。B君は、今まで一人ではできなかったことや、やろうとする姿勢が見えにくかったが、授業での頑張りや周りに認めてもらったことや持久走などの目標を立てた活動によって、自ら進んで行うようになってきた。学ぶ姿勢を身につけたことは、学習面を確立するとともに行動面も成長し、友達との関わり方の変化へとつながっていった。さらに、自分が「わからない」と思ったことを周囲に伝えることを通して、学びを自分のペースで行っていく事ができた。そして、学習課題が「わかる」「わかったこと」の喜びを周りの友達の賞賛を受けて、B君にとっての学習意欲の向上につながってきた。また制作活動における授業では、今まで自分一人の世界で行ってきたことが、周りの友達の作品鑑賞を通して、友達の作品や思いを見聞きして、時間を追う毎に自ら友達へ良さを伝えている姿がみられた。つまり、授業の教材を通して、友達と関わる機会をつくりだし、相互に認め合う場の設定によって、関わり方が変化した。

10. A君、B君からみる学級の果たす役割

小学校中学年から高学年に向けて、子どもたちは、他者を意識し行動する。互いに失敗が分かることから、自分の失敗を見られたくない、したくないと思い、友達との交流が特定の仲間集団になることもある。しかし、A君、B君にとって学級そのものが自分を表現することを積極的に行える場となっている。そこには、教師の「誰にでも失敗をしながら学んでいく」ことを子どもたちに向けて伝えている姿がある。それは、失敗することがこわい、はずかしいと子どもが思い、行動を止めることなく、失敗を活かして次の行動へ移ることができるようになってほしいと考える教師の声かけである。そのためにも、子ども同士による注意をなるべくさせないような教師の声かけが重要である。子ども同士注意をし合う状況では、注意をした子どもが友達を自分よりも下に見てしまうことがある。教師が子どもよりも先に指導することで、周りの子どもたちが、自然とその子にアドバイスし、友達にやさしくなれるきっかけにもなる。また、友達の失敗を見て周りの子どもたちが自分の行動を見直すことにもなり、失敗の解決策を学ぶ。実践的かつ体験的に覚えていくことが人との関わり方を学ぶ一歩になっていく。教師による子ども一人ひとりのよさを全体へ投げかける指導が、実際の子どもの発言の中に表われ、友達のよさを伝えあう活動に結びついていることは、教師の指導が子どもの活動と結びつき、心をも育てているからである。全体から個を支えたとともに、個を通して全体が育つには、このような指導が求められている。

また、子どもたちにとって、勉強が分かる、楽しいと感じることは、学ぶ意欲となり、様々な活動への自信につながっている。子どもたちが、何をどこまで分かっているのか、分からないのかを教師が把握するだけでなく、子ども自身が教師へそれらを伝えられる事も重要である。

11. 自らの実践につなげていくには

筆者は、学級の子ども一人ひとりの個を大切にしながらも、集団を意識した学級づくりを目指していきたくと考えている。そのためには、次の5点に重点を置く。

1つめに、子ども一人ひとりの個の特徴をつかむこと。一人でできることと、支援の必要なことを分けて考え、支援を行う。必要以上の支援を避ける。2つめに、子どもの思いを教師が受け止め、大切な存在と思っていると表現する姿勢。常に、個を意識した集団への投げかけを行う。3つめに、発達段階と子どもの状況をすり合わせ、日々試行錯誤を繰り返しながら全体と個への指導を行う。4つめに、子ども一人ひとりの努力を学級全体へ広げていく。5つめに子どもへの指示は、抽象的な表現を避け、子どもがわかる言葉に置き換えて伝える。以上のように、子ども一人ひとりを意識した指導を行いたいと思っている。

また滞在実習を通して、子ども一人ひとりを意識して学級全体で認め合える雰囲気を作り出すためにも、教師の細やかな指導支援が重要であると以前にも増して意識した。学級は、人との関わりを育てる場である。子どもたちは、成長することで他者を意識して、自分との違いを知り、仲間を形成する。子どもたちが違いに気がついた時に、それぞれを受け止めるような集団を形成していきたい。子どもにとって、友達と違うことは、悪いことではなく、人には善悪の両面があることを、認め学ぶ場が学級である。そのためにも、教師が学級において関わりの手本となることも時に必要である。学びを実践しながら、子どもの活動に対してきめ細やかな支援（声かけ）を行い、子ども一人ひとりが学級で認められ、全員が安心感を抱けるクラスを目指したい。